

海外のスミス研究

水 田 洋^{*}

今お渡ししますのは、4月にグラーズゴウで行われた『国富論』200年のシンポジウムのとき、グラーズゴウ大学図書館で展示会をやった、そのカタログです。ここにありますが、スミスだけでなく、18世紀のスコットランド思想も含まれています。中をごらんになると、解説を見ていただきたいのですが、イギリス、とくにスコットランドのライブラリアンがもっている常識の水準がおわかりになるとおもいます。きのう杉原さんと、どこからはじめたらいいだろうということで、電話で話したんですが、日本のスミス研究史というのは戦後をとるか、戦前をとるか、あるいは1938年をとるかによって、三つぐらいのやり方があるわけです。ところがヨーロッパのスミス研究史というのは、スミスが生れたときから始まるわけじゃありませんけど、多少有名になった頃から、はじまってるわけです。スミスが最初にものを書いたとき、つまり1755～6年に、『エディンバラ・リヴィウ』の論文を書いて、59年に『道徳感情論』を出版する。そのあたりから、スミスに対する批判として、スミス研究史が、はじまってるわけです。そこまでやるには、今日は時間がありません。しかし、それではどこに中心を置いたらいいか。そのまえにもう一つ、最近サミュエル・ホランドーという人の『アダム・スミスの経済学』の翻訳が東洋経済から出版されました。これは、大変厚い、中味も十分につまっている、若冠38歳にしては、と思われませんが、ただこのスミス研究は、近代経済学でスミスをわりきってしまして、「近代経済学こういう理論が、スミスのそこにあり、ここにある」というやり方なんです。近代経済学に限らず、マルクス経済学でもいいんですが、現在の理論の水準で、過去を割り切るやり方が、一体、研究史の中に入るかという、これは、歴史研究としては、大変な邪道なんでして、それをやるくらいなら現在の理論で勝負すればいいわけです。そういう邪道を研究史の中に入れるかどうかなんですけど、そこに問題があります。マルクス主義でも本来は現在の革命をやるわけですから、200年も前のことはどうでもいいとおもわれるかもしれませんが、それにもかかわらずマルクス主義は、歴史的な構造をもっている。だから、ときどき、現在の理論で過去を割るという傾向が出てきますけれども、それはやはり、マルクス主義の研究自体として間違っている、ということがいえるわけです。ところが近代経済学の場合には本質的に非歴史的な機構なので、そのホランドーのや

^{*} みづた ひろし 名古屋大学教授

り方が、近代経済学の方角として間違っているとはいえないわけです。しかしそれをやってみて何になるということは、いえるわけです。これからお話するなかで、スミス研究の中のいわゆる近代経済学的な例が他のよりも、手うすになると思いますが、それには今いったようなことが本質的にあるからです。とはいっても、最近近経学者の中から、アダム・スミスへの関心が増えてきたということも事実です。

もう一つ近代経済学の側からのスミス研究が、ドイツで出ている。これは、ニュルンベルク大学のレクテンヴァルトがことし出版したもので、312頁です。まだ広告だけしかきていませんが。そういうスミスへの関心が、近代経済学の中で高まったのは何故かという、これには二つの理由があると思います。一つは、一般的に理論の中から歴史への関心が出てくるのは、その理論が何か新しい問題にぶつかるか、あるいは理論の中での欠陥が出てくる。理論が行きづまった場合、その理論が本来もっていた何かの意味、何かの道具が、どこかで忘れ去られたのではないか、あるいは、もう少し一般的ないい方をすれば、一つの理論が本当にわれわれのものになっているかどうかを、もう一度検討する、その理論の発生期を洗ってみる、そういうやり方は、近代理論であれ、マルクス理論であれ、やるわけです。そういう歴史的な反省が、いま、近代理論の中で行われているのかも知れない。かもしれないというのは、76年のお祭りさわぎに便乗して出てくるのもありますから、あまり内面的な理由ばかり考えていると見当ちがいになるおそれもあるということです。

そういう理論的反省が行われているかもしれないということの根拠は何かというと、近代経済学もマルクス経済学もふくめていつてるわけですが、生産力第一主義に対する反省なのです。つまり、高度成長が壁にぶつかって、理論が、経済学が反省の時代に入っている。（小林昇さんは、経済学というものは短命であるといい出している。これも一つ問題だと思いますけど、今は、直接関係ありませんから、はぶきます。）それからもう一つ、それと並んでとくに、日本の現象としては、例の石油ショックのときの、「千載一遇」という事件がありました。

日本の財界は、都合のいいときは自由競争、都合が悪くなると国家保護をもとめる。そういうやりかたが、あの石油ショックにも、一方では千載一遇の好機だとかせぎまくり、他方では、資源危機だからと国家保護をもとめるというように非常によくあらわれていたのですが、そういう自由競争は、本当にスミスのときにいわれている自由競争なのか、ということです。千載一遇の思想でいえば、あらゆるもうけの機会を最大限に利用すること、つまり完全自由放任がスミスのおしえだということになるし、それをおさえる方でも、われわれは、古典的なスミスの時代に生きているんじゃないということをいって、スミスの自由主義とはそういうものかどうかは承認している。しかし、本当にアダム・スミスの時代が過ぎたのか、ある

いは、アダム・スミスの時代にまだ到達していないのか、それがすでに問題ではな
いか。では、スミスの自由主義というのは、一体何か、ということから、あらため
て、アダム・スミスが、経済学者であっただけでなく、道徳哲学者でもあったんだ
ということを問題にするわけです。じつは、スミスの経済学は自由放任主義だが、
その外側に道徳哲学の枠がはめてあるということでは、スミス経済学およびその自
由主義を理解したことにはならないのでして、経済学と道徳哲学はそういうふうに、
外面的につながっていたのではなく、相互に浸透していたのです。そういう意味で
の『道徳感情論』と『国富論』との関係を、われわれスミス研究者は、大分前から
自明のこととしていたんですが、それが近代経済学者の中でも、まだ外面的につな
がりとしてですが、ときどき問題になっている。ときどきというのは、近代経済学は
本質的に非歴史的な思考方法をとりますから、すべての議論がスミスに戻らなくて
いいわけです。もしスミスにもどるとすれば、『国富論』より『道徳感情論』の方
が面白く、重要だというような意見がでています。それは『道徳感情論』のどうい
う所かというところ、自由競争とは、各人が自分の利益を追求し、自分の企業を改善す
る為に全力をあげることなんだけれども、どこまで、それをやっていいか、つまり、
相手を押し倒すというような不正行為がどうして制限されるかというところ、これは、
利害関係のない見物人が見て同感できるかどうか、という枠がはめられている。そ
れでは、押し倒したりすることになぜ、利害関係のない見物人が同感しないかとい
うところ、実はこの見物人というのは、他のときには、自分自身が競争の当事者である
わけです。つまり、スミスの市民社会というのは、こういう平等な人間があるとき
には競争の当事者になり、あるときには見物人になり、つねに、立場が転換されて、
それで動いている。だから今の見物人にとって、自分が当事者になったときにああ
いうふうに押し倒されたらかなわんという感じがあるのです。そういう公平な第三
者、中立的な、利害関係のない立場、そういう第三者の共感ということが自由競争
の枠としてはめられている。その枠ぐみだけは、これは権力ででも守られなければ
ならない。スミスの中で権力の発動がはっきりに出てくるのは、司法と国防ですけど、
それは、フェアプレーの原則にもとづく自由競争を維持するための仕事なんです。
例えば、ロッキードみたいなことが起ったら、これをどんどん摘発するのがスミス
の国家権力であり、だからこのへんでわれわれは、スミスの時代に到達していない
ということになるだろうと思うのです。もう一つの例をあげると、独占禁止。スミ
スが独占に反対していたのは、歴史的にいえばもっと古い独占なんですが、しかし、
とにかく、スミスは、自由主義者といわれるけれど、手ばなしの自由ではなくて、
自由競争を実現して、維持するための権力の発動については、ちゃんと承認してい
たんだということ。ロッキード事件は、企業が国家権力とゆ着して、フェアプレー

原則をふみにじった、というかたちで処理できるわけです。うらがえしていえば、さっきいったように、絶えず立場の転換が行われる社会は、社会を構成する人間が、平等でなければなりたない、ということになります。近代経済学が、スミスから、学びつつあるのはこういうことだと思うのです。その点では、さっきいきましたホランダーの研究は間口をひろげすぎて、焦点がボケているのではないかという感じがあります。今の関心の一つのあり方というのは、そうなんですけれど、近代経済学側からの『道徳感情論』への関心そのものは、決して、世界的に石油ショックが起ったことから始まっているのではなくて、歴史的には1956年ごろから、約20年ぐらいの間に次第にたかまってきたわけなんです。スミスにおける経済学と道徳哲学の問題そのものについての議論は、それよりも約50年前、世紀のかわり目ぐらいに、前例がありますから、それもお話しなくてはならないとおもいます。

ここまでは、序論としてきいていただいて、200年まえからはじめます。スミスがヨーロッパの各国に浸透していくのは、ナポレオン戦争を機にしている。1776年に、『国富論』が出たときに、ドイツ訳の1巻が同年に出ている。だから、その意味では浸透は非常に早かったと考えられるのですが、その当時の事情からいって、今ほど早いはずは勿論ないわけで、たまたま、76年に、同年にドイツ訳が出たというのも、翻訳者のシラーという人が、当時、ロンドンに駐在していたジャーナリストであったためらしい。フランスでは『国富論』の翻訳は、最後の啓蒙主義者といわれる、コンドルセ（1794年に没）が、ノートをつけて出すということが、タイトルには出ているのですが、この最終巻のコメントは見たことがない。どうもコンドルセは、ついにかかなかったらしい。かれの『国富論』についての抜き書きがフランスの雑誌に発表され、それが、もとになって、スミスの思想がスペインへ導入された、というような事実が、かなりあとになってわかった。『国富論』はそういう調子で少しずつヨーロッパの大陸に浸透していったが、そのまへの『道徳感情論』も、とくにフランスでは、評判がよかった。コンドルセ夫人の訳が出たのが3番目ということですから、その前に、二つあるわけです。

フランス革命のあと、19世紀になってから、ナポレオン戦争が終って、大陸へイギリスの商品が出てくる。それと一緒にスミスの思想が、フランスへ流入する。それを受けとったのが、フランスの中の自由主義経済学のトップバッター、スミスに対して多少批判的であったセイ、セイと一緒に、産業社会の建設ということを主張したサンシモン（空想的社会主義者）。このあたりに、スミスが、むかえ入れられる。やや遅れて、ブルドン、イギリスでいうと、リカード派社会主義といわれている人達、この人達の中にスミスの影響が出ている。これはイギリスで、正統派経済学とよばれるようになった、スミースーリカードの線を見無視しているわけで

はなく、それ以外の目につかない所でも、イギリスでも、フランスでも、スミスが、初期の社会主義者にむかえ入れられたということです。ドイツでも、近代化の浪にのってスミスが受容されただけでなく、マルクスの直前のアナーキスト、マクス・スティルナーが、スミスの『国富論』を1846年に翻訳しています。ライブチヒのヴィガンという、社会主義関係の出版をやっているところから出ている。ただしその中には、スミスについての特別の解説はありません。こういう初期社会主義者達がスミスに関心をもったということは、意外に思われるかも知れないが、彼らは、スミスが『国富論』でえがいた社会、さっきいった意味で『道徳感情論』と結びついているわけですが、そういうフェアプレーの世界、すべての人間が平等であって、常に立場の転換ができるというような世界を、社会主義社会、あるいは無政府社会というふうに考えていた。それはスミスの中に、政治権力論というのが、少なくとも、あからさまな形では、出ていないということと対応している。分業と協業の世界、しかも階級対立が、はっきり出ていない。そういう世界は、初期の社会主義者によって、一つの理想社会の青写真というふうに、受けとられることになります。

その次に、スミス解釈が問題になるのは、19世紀の終りに近いころ、いわゆるアダム・スミス問題が発生したときで、これについての本が出るのは、1880年代の半ば、85年前後から1900年のはじめ10年ぐらいの間だと思います。その争点は、スミスは『道徳感情論』では利他心の道徳哲学者として出発しながら、『国富論』では利己心の経済学者になった。その間に矛盾があるのではないか、そういうことなんです。この問題が、ドイツでなぜ出てきたかという、ドイツの中で1871年の限界革命以降限界効用学派がウィーンを中心に、だんだん出てきた、それに対して歴史学派の経済学者、講壇社会主義者たちが批判する。その二つの学派の論争が、スミスの中の二つの要素をめぐる争いになった。歴史学派は、スミスの中の利他心の道徳哲学者という面を強調し、一貫性があるという場合には、そっちの方でスミスが統一しているということをいうわけです。いわゆる利他心の経済学者であるスミスは、フランス唯物論の影響で邪道にふみ込んだ、というふうに考えた。ところが、限界効用学派の方は逆に、利己心の経済学、『国富論』の体系そのものが、スミスの本質であるといった。ということで、今までの解釈では、アダム・スミス問題は、二つの学派の理論闘争、あるいはその背後にある政治闘争、その経済学史的な反映であった、といわれています。ところが、そう簡単には、いいきれない、そういう面もあるが、まだ他の面もあるのではないかという感じがするわけです。その一つの手がかりになるのは、テニエス（ドイツの社会学者）が『トマス・ホップズ』を出しているその時期が、実は、アダム・スミス論争の、いくつかの主要な文献が出た時期だ、ということです。ウェーバーでいうと、『国民経済政策』あれ

が、ほぼ、同年なんです。テニエスのホップズ論は、市民社会の国家権力だけでなく、社会主義社会の問題までふくんでいて、この本から、ハインリヒ・クノーと『ノイエ・ツァイト』誌上で論争がおこなわれるのですが、それはいまの問題ではありません。しかしとにかく、この時期にイギリスの近代思想が、ドイツで再評価されたことはたしかで、それはウェーバーの中にもあらわれている。イギリス型近代的個人の探求。そのもとは、70年代にニーチェや、ブルクハルトが、イタリア・ルネッサンスへの憧れでしめしたように、ドイツの後進性に対する嫌悪と批判から、イタリアあるいはイギリスに近代的個人の原型を探すという方向にむかったのではないかと思います。そうであるとすれば、スミスがそのときすでに近代社会と、それを構成する近代的な個人について描こうとしたものが、当然ずいといえども遠からずぐらいの所で、少なくとも感覚的に、あるいは感情的には、つかまれているのではないか。

そういう推定のもう一つの根拠は、このアダム・スミス問題の中に、新カント派の哲学者がかなり参加しているということです。新カント派がどこからはじまるかといえば、「カントへ帰れ」といったのは、アルベルト・ラングですね。ラングの労働問題の第2版の序文だったと思います。これが60年代の終りから70年代にかけて。そこから新カント派の哲学というのが出てきたんです。それはまた、丹念な文献的な、追跡を必要としますが、大ざっぱにいうならば、この中には、あとで新カント派社会主義になっていくような要素がある。つまりカントの人格というのは、後進ドイツ資本主義においては、実現されないのだ。したがって、それは社会主義へ持ちこされる。だからドイツのブルジョアジーは、カントの遺産相続人として不適格であるという宣言、ということになる。そういうかたちで新カント派社会主義が出てくる。その一番典型的なのが、カール・フォアレンダーの『カントとマルクス』です。そういう流れが一つあって、アダム・スミス問題に新カント派の人達が参加する。その一番代表的なのが、エクスタインという、ドイツの哲学者で『道徳感情論』の各版対照のドイツ訳をやった人。もちろんそれは非常にドイツ的な解釈が入っておりまして、日本では、米林訳の『道徳感情論』は、この版によっています。

以上のように、歴史学派、限界学派、新カント派、社会主義をふくめての、スミス問題が、あらわしているスミス解釈とは何かということについて、問題提起をしておきます。これまで、アダム・スミス問題についてのべたものとしては、まず、大河内一男さんの『ドイツ社会政策思想史』、これは、僕がアダム・スミス問題についてふれた最初の文献です。それから、高島さんの『経済社会学の根本問題』。今では、これは『アダム・スミスの市民社会体系』の中に含まれています。さらに

大道安次郎さんの、『スミス経済学の生成と発展』、大河内さんの『スミスとリスト』。大体が、さっきいったような、歴史学派と限界学派の論争の政治的対立の、経済学史的反映なんだという解釈です。

さて、アダム・スミス問題は、世紀のはじめ頃、姿を消します。何故姿を消したかというのが問題なんです、ドイツの資本主義経済の発展が、それを解決した、あるいは、世界大戦がはじまって、革命がはじまって、全部巻き込んでしまったといえるかも知れません。とにかく、それからしばらくの間、スミス研究は、見るべきものがなかった。イギリスでは、ほぼそのころ、つまり、スミス問題が、ドイツで終る頃、キャンナンが『国富論』を出しました。1904年だったと思います。それが出て、『国富論』研究が、便利になったのですが、キャンナンという人は、スミスに対して非常に低い評価しかしなかった。文献的にあれだけスミスに一所懸命になりながら、理論的にこんなに低い評価しかしなかったというのは、大変めずらしいことだともいいますが、とにかくかれは、資料的には『国富論』研究を促進しながら、内容的にはほとんどなにも貢献しなかったといえます。そういうものが出たあと、1926年が『国富論』の150年にあたります。そのときに、シカゴとロンドンで、記念講演会があります。そういう『国富論』150年の記念が、それ自体どんな意味をもったかといえますと、とうてい前の段階のアダム・スミス問題の比ではなくて、やはりスミスは戦後のごたごたの中に忘れられてきたんではないか。むしろ、150年記念の意味は最近になって掘り出されてきた、という感じがえる。

その後のスミス研究は、26年から、38年まで、どうも途切れているようですが、38年に、日本でもそうなんですが、スミス研究復活の兆候があらわれた。それが、一つは、ロイ・パスカルというイギリスのマルクス主義者、ハンガリー事件のときまで、イギリスの共産党員であった、バーミンガム大学のドイツ研究の教授です。この人が、『モダン・クォーターリー』という人民戦線的な雑誌に論文を書いて、そこでスコットランド歴史学派という名称を、アダム・スミスを中心とする思想家集団の名称として、はじめて使った。パスカルが何をいおうとしたかということ、ふつうに「歴史学派」というのは、過去を尊重する保守主義なんです。過去の尊重としての歴史主義が、その当時のドイツの思想界で、マイネッケの『歴史主義の成立』というかたちで強大な姿をあらわす。マイネッケをナチズムあるいはファシズムの人とみるかどうかについては、いろいろな意見があります。けれども、そういう役割をある程度演じたことだけは指摘できます。それに対するパスカルの学問の領域での反撃、つまり思想家としての反撃が、この論文です。ここでもまた思想史の論争は、政治闘争の一つの形態であるということで、アダム・スミス問題と同じようなことがいえる。ドイツの保守的な、反動的な歴史主義に対して、パスカルは何

をいいたいか。何をいうために、スコットランドへ移動したか。ここでは、歴史の進歩（ここでいうと、資本主義社会の発展）が、歴史主義の中心になっている。つまり、歴史が、過去の集積として現在を規定するのか、現在から先へのびていくものとしてとらえられるのか。歴史的発展の思想というのが、歴史主義なんだ。それをスコットランド歴史学者は、市民社会の生産力の発展ということで、つかまえている。その意味では、スコットランド歴史学者は、マルクスの史的唯物論の先駆者であると、パスカルはいった。ただその解釈がどこまで当たっているか、個別研究を積み重ねていくと、さっきいった思いつきとあとの実証とのくいちがいが、したがって、思いつきつまり問題意識を、いくらか修正しなければならないところがでてくる。それにもかかわらず、その枠組だけを依然として継承しているのが、ロンドン・ミークで、かれは「マルクス主義社会学に対するスコットランドの貢献」という論文を書きましたが、それは1954年です。そういうパスカルの先駆的な貢献が行われたのが1938年、それから、戦争がはじまりますから、イギリスでは、とてもアダム・スミス研究どころではなかった。この研究が、直接ではないが、ちがったかたちでアメリカに引き継がれていった。グレイディス・ブライスンという女の人の『人間と社会』という18世紀スコットランドの研究、つまり、18世紀における、人間と社会に関するスコットランドの研究、ということなんです。それが、パスカルとほぼ同じような範囲で、書いている。そこで戦前は切れるわけです。

戦後は、いつ頃から始まるかといいますと、僕が1954年に、グラーズゴウに留学したときは、アダム・スミスの研究だといったら、「何をばるばる物好きな」といった顔をされまして、「アダム・スミスの銅像がない」といったら、当り前だといわれました。グラーズゴウの町にいったら、アダム・スミスの銅像ぐらいあるのかと思ったら、ロバート・バーンズの銅像はあるんですが、アダム・スミスのはどこへ行ったってない。その頃は、そういう状態だったんですが、僕の留学期の終り頃、1956年頃から、だんだん、アダム・スミス研究、とくに道徳哲学への関心が、高まってきた。その先駆、つまり戦後におけるスミス研究の復活の先駆形態は、グラーズゴウ大学にアダム・スミス・プロフェッサー、アダム・スミス名称政治経済学教授というグラーズゴウ出身の実業家が寄付した講座があって、ここに、アレック・ローレンス・マクフィーという教授がいて、この人も、はじめは、別に、スミスの研究家ではなかったんです。大体が、第一次大戦で、機関銃を腹にくらって、負傷して、とても普通の仕事はできないからといって、大学に入ってきたらしい。しかし、そのわりには大変いい仕事をします。その結果が「スコットランドの伝統」という題の講演をして、『スコティッシュ・ジャーナル・オブ・ポリティカル・エコノミー』に発表された。それを中心にして編集したのが、『社会における

個人』という本で、翻訳も出ています。そこで、スミス研究の関心が、『国富論』よりも『道徳感情論』の方にひかれていく。このあと、キャンベルの『アダム・スミスの道徳科学』までのあいだに、経済学でないアダム・スミス研究が、いくつか出ています。そういうスミス研究のひろがりとは並行して、スコットランド歴史学派というようなグループの研究が、だんだん活発になってくる。

国際18世紀学会というのがありまして、それが、第1回の大会をやった1963年には、スコットランドの啓蒙なんて、問題にならなかったんです。ところが、1967年の第2回るとき、スコットランドのセッションができ、だんだんそういうかたちで、18世紀のスコットランド思想の研究が、広がっていく。67年という年は、同時に、アダム・ファergusンの『市民社会史論』の200年ということで、B. B. C. で放送シンポジウムが行われ、それが出版されましたし、それよりまえに、『ケンブリッジ・ジャーナル』という小さな雑誌に、ダンカン・フォーブスという人が、スミスを中心にして、18世紀のスコットランドについての論文を四つ書いている。そして、最近、フォーブスは、ヒューム研究を出版しました。1973年は、スミスがうまれてから、250年で、スミスの故郷のカコーディの町が、国際シンポジウムをやりその記録が出版された。そして、今度は、『国富論』200年の、またお祭りになる。このお祭り、4月2日から5日までなんですが、朝から夜までぶっとおしでやられるもんですから、体力的に、まいっちゃうし、さっきいったように、今の理論経済学の問題を、スミスの中に挿入してみても、それはそれとして一定の意味はあるだろうけれども、少なくとも僕の関心にとっては余り意味がない、というわけで、後半はさばりました。聴衆（経済学者）の中から、諸報告はいいたい、スミスとどういう関係にあるのだ、というささやきが何度もきこえました。それほど問題が現代的でして、現代的な問題をスミスの中に反映してみようということが、終始みられたように思います。

その中でオープンセッションが半日開かれ、「アダム・スミス」という映画まであった。そのオープンセッションの中で、いろんな意見が出ていました。例えば、東ドイツから、タールという人が、『国富論』の新しいドイツ訳を出しました。おかしいことに、『国富論』が出るというと、東西並行して出るんですね。レクテンヴァルトの訳とタールの訳と両方でてるわけです。そのタールが、75年にハルレの大学で記念シンポジウムをやったときには、マルクス主義の解釈だけではなく、両方の解釈をならべてやったというんです。並べてやるとは、どういう意味だか、よくわかりませんが、それにもかかわらず、ここでは、近代経済学一本で、マルクス主義の解釈がないのは、非常に残念であると、タールがいいだした。大変残念だということからは、マルクス主義の解釈は、こういうもんだといってくればいいんで

すが、タールははじめから、「われわれ非英語国民は……」と、ことばの弁解をしているし、じっさいにあとの方はしどろもどろになったんで、僕もそういうふうになっちゃまずいと思って、あとは何もいわずに、黙ってたんですが、マルクスの問題は、実は出ている。出ているのにだれも気がつかない。それはどういうことかという、3番目の報告に、アメリカからきたルイスの経済発展の問題というのがあって、後進国開発の問題をとりあげ、そこでスミスにさっと言及してるわけです。いかにも現代的であり、スミスの歴史的な文脈を無視しているようですが、その中で彼は、『国富論』第3篇を紹介しながら、今の後進国開発は、外国貿易依存では駄目で、国内の農業を再編成し振興することを優先しなければならないといったのですが、これに対して討論に立ったフラ・ミントは、ロンドン大学の教授ですが、たしかビルマ人ですから、そういう問題は、するどいと思ったのに、全然逆で、スミスの中にはそういう対立概念はない。よんでみたけれど、とくに農業の後裔としての工業、外国貿易の後裔としての工業が、ならんでいるだけであって、スミスはただ、併置しているだけで、どっちがどうといっているのではないということです。戦後間もなくおこった、ドップ＝スージー論争を彼らがもし知っていたら、もう一つ面白い議論の展開になったと思うんですけど、ミントが、秋の経済思想史の会議（グラスゴウであります）に報告するので、この話をしてみようかと思っています。全体として、プログラムの中で、スミスの歴史的評価として、一番すぐれていると思われるのは、ペルファストのブラック（本人が経済思想史の専門家ですから）の『歴史的展望におけるスミス』で、これはスミスに対する歴史的評価を『国富論』出版の50年、100年、150年と区切って、その時点でまとめた、非常に要領がよく、面白いものです。むしろ、全部翻訳したらいいと思うのです。

この会議が行われたときに、記念事業のひとつとして、グラスゴウ大学版アダム・スミス著作集の、『国富論』が記念論文集と同時に出版されました。ずいぶんこまかい註がついているだけでなく、経済学の文献の出版のしかたとしては、最初の、書誌的なテキスト・クリティークをやっている。たとえば、印刷にあらわれている組版の状態から、おなじ1776年のなかでも、初期のものとあとのものととの区別ができます。もっともそのことが、一体、どれくらいの内容の研究に役に立つのか疑問なんです。記念論文集の方は、じつは1975年にできていたのですが、『国富論』と同時発売ということになりました。それにたいするかなり大きな書評を、T. L. S. の3月12日（『国富論』が出たのが、3月9日ですから）にドナルド・ウィンチが書いている。それをうけて、フランスではフィガロ、イタリアではラ・スタンパというような新聞が、スミスについての小論文をのせています。こういう新聞までが何故それほど、今、スミスをとりあげるのかわからないのですが、どれも、

『国富論』だけでなく『道徳感情論』の重要性を指摘しています。

結局、また、スミスはわれわれにとって何なのかということになってきて、それは、近代社会の中での個人のあり方、近代的な個人とは何かという問題になるとおもいますが、そこまでくるとスミス研究の現状ではなく、中味の問題です。たとえば、スミスにおけるレーニンの問題、レーニンにおけるスミスの問題といった方がいいかも知れない。あるいは、マックス・ウェーバーにおけるスミスの問題、つまり近代的個人は現代にとって何であったか。それが、今のところ、僕にとってのスミス問題なんですけど、このために、もう1回、アダム・スミス問題に、さかのぼろうかと考えているところです。

残部僅少！

刊行200年記念 ファクシミリ版

好評発売中

アダム・スミス 『国富論』

アダム・スミスの名著「国富論」刊行200年を記念して、その初版本をファクシミリ版で完全復刻、話題をよんだ国際協力出版。

製作監修

ケネス・E. カーペンター
(ハーバード大学クレス文庫司書)

大河内暁男

(東京大学教授)

世界共通ナンバー入り限定版

4折判2巻本総ページ 1114P.

総革製限定版解説付

定価 65,000 円

創業45周年 雄松堂書店

東京都新宿区三栄町29 〒160

☎03(357)1411 振替東京2-71208